

研究報告

高校生の「意志力」と乳幼児期体験との関連

川出富貴子¹⁾ 高田律美²⁾ 川崎幹子³⁾ 鍵小野美和⁴⁾¹⁾ 広島文化学園大学看護学研究科²⁾ 愛媛県立医療技術大学³⁾ 宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科⁴⁾ 岐阜医療科学大学保健科学部

要旨

乳幼児期の快感覚体験が、思春期の多感な時期にある高校生の「意志力」にどう関連しているのかを明らかにするために、協力の得られた高校生476名(回収率83.1%)に対して、自記式質問紙票による調査を行った。

1.「乳幼児期の母親との快感覚体験」と「意志力尺度の総和」である意志力の構成因子「生存価値観」「生存意欲」「前向き力」「創造力」「忍耐力」の5因子ともに正の相関を示した。2.「乳幼児期の食事・睡眠・入浴・排泄の快感覚体験」と「意志力尺度の総和」・「生存価値観」「生存意欲」は正の相関を示した。3.「乳幼児期の遊び・生活体験」と「意志力尺度の総和」・「生存価値観」「創造力」はいずれも正の相関を示した。このことから乳幼児期の快感覚体験は思春期の意志力に関連することが明らかになった。なお「乳幼児期の母親との快感覚体験」と「乳幼児期の食事・睡眠・入浴・排泄の快感覚体験」の全項目において男性に比べ女性が高い値を示した。

キーワード; 高校生, 意志力, 乳幼児期, 快感覚体験, 遊び

I 緒言

近年、我が国は物質的には豊かになったが自然環境は著しく減少した。加えてメディア社会が進展し、子どもを取り巻く環境は大きく変化している。これに伴い子ども時代の遊び体験も大きく変わり、ゲームやテレビなどのバーチャル体験が多くなっており、バーチャルな知的遊びによる意志の弱体化が示唆されている¹⁾。また、大学生を対象とした調査結果から乳幼児期体験における「母親への愛着」による快感覚体験および睡眠・排泄などの基本的欲求による快感覚体験、運動・平衡遊びや触覚体験が、意志力に関与していることが報告されている²⁾。R.シュタイナーによれば子どもの「意志」の育成は生まれてから7歳までに育成され、子どもの生きる力の基礎となる「意志」の育成の重要性を示唆している^{3),4)}。

思春期の始まりは第二性徴の発現という身体的特徴によってあらわされ、近年では身体面の成長は早まっているが、精神面の成熟が遅れている。思春期は11歳ごろから20歳ごろまでと言われており⁵⁾、心理的に不安定になる時期であり、これを自我発達でとらえるとエリクソンの第Ⅶ期(12歳～18歳)と一致している。この時期はまた、アイデンティティーの感覚を獲得する時期でもある⁶⁾。さらに、思春期という身体的な変

化に伴い心理的な動揺の大きい時期に生きる力の基となる「意志力」はどう維持されているのか、また、乳幼児期の記憶にある重要他者との関わりや快感覚体験および遊び・生活体験を思春期の子どもはどうか受けとめているのか、子どもの心理的な発達過程を縦断的な概念で見ていく必要があると考えられる。

そこで、本研究では思春期にあたる高校生の「意志力」と乳幼児期の体験との関連を明らかにすることを目的として調査をおこなった。

用語の操作的定義

意志力:ここでは将来についての夢を持つ力、将来について希望を抱く力、意欲、忍耐力、根気力、コミュニケーション能力、創造力、体力、共感力、生活意欲、人生に対する肯定感、庇護の感覚、日常生活の満足感、奉仕の感覚、以上の14の概念を包括すると規定する。

II 研究方法

1. 対象者

中国地方と四国地方にある公立高校、2校の同意が得られた1年～3年生573名である。

2. 調査方法

無記名自己記入式質問紙調査を実施した。調査期間は2009年12月～2010年1月である。

3. 質問紙調査の内容

1) 属性：性別，年齢

2) 「意志力」に関する質問項目(表1)は「意志力に関

する質問紙」を用いた⁷⁾。質問紙は18項目5因子で構成されており，第1因子5項目は「生存価値観」，第2因子6項目は「生存意欲」，第3因子3項目は「前向き力」，第4因子2項目は「創造力」，第5因子2項目は「忍耐力」である。回答には4件法を用い，「そうである」2点，「少しそうである」1点，「あまりそうではない」0点，「そうではない」0点とした。

表1 意志力の質問項目と構成因子

構成因子	質問項目
生存価値観	生きていてよかったですか。
	生きていることに価値があると感じたことがありますか。
	いつもだれかに見守られていると思いますか。
	困ったときに助けられた経験がありますか。
	日常によるこびがありますか。
生存意欲	<u>生きていることに価値がないと感じたことがありますか。</u>
	<u>自殺したいと思ったことがありますか。</u>
	<u>生きていてもつまらないと思いますか。</u>
	<u>大切な人から見捨てられたと思った経験がありますか。</u>
	長生きしたいと思いますか。
	<u>日常に悲しみがありますか。</u>
前向き力	将来について夢がありますか。
	将来について希望がありますか。
	意欲(何事にも積極的であること)がありますか。
創造力	ものを作り出す力がありますか。
	創造することが好きですか。
忍耐力	忍耐力(嫌なことがあっても耐える力)がありますか。
	根気力(単純な作業を持続する力)がありますか。

斜体は逆転項目

3) 生まれてから7歳までの乳幼児体験の質問項目：乳幼児期の快感覺体験に関する質問紙⁸⁾を用いた。内容は以下のとおりである。

①「乳幼児期の母親との快感覺体験」の質問項目：原本6項目のうち意志力との相関係数で高値を示した上位3項目，「母親のそばで寝て安心」「母親の声で落ち着く」「幸せな気持ち」である。

②「乳幼児期の基本的欲求の快感覺体験」の質問項目：原本24項目のうち意志力との相関係数で高値を示した上位の12項目を用いた。すなわち，食事，睡眠，入浴，排泄について，それぞれ「匂い，気持ちのよさ，楽しさ，あたたかさ，安心感，不安感」のうち上位3項目，計12項目である。選択肢の形式はSD法を用いて，「いい匂い(食事では“おいしそうな匂い”)－嫌な(食事では“まずそうな匂い”)」，「気持ちいい(食事では“おいしい”)－食事では“まずい”)」，「楽しい－苦しい」，「温かい－冷たい」，「安心－不安」，「満足－不満足」とした。回答は「美味しそうな匂い」2点，「ややおいしそ

うな匂い」1点，「ややまずそうな匂い」0点，非常にまずそうな匂い」0点とした。

③「乳幼児期の遊び・生活体験」の質問項目：原本25項目のうち意志力との相関係数で高値を示した上位15項目を用いた。「運動・平衡遊び」より手足や身体を動かす遊び，活動的な遊び，リズムカルな遊び，鉄棒・のぼり棒・雲梯，集団遊び，「受動的触覚遊び」より水遊び，泥んこ遊び，川遊び，「能動触覚遊び」より草花遊び，手遊び，自然素材での遊び，「生命感覚遊び」より虫取りの体験，動物や虫とのふれ合い，「受動触覚体験」より抱っこされた体験，おんぶされた体験の計15項目である。選択肢は4件法とし，回答は「よくした」2点，「時々した」1点，「あまりしなかった」0点，「全くしなかった」0点とした。

4. 分析

1) 「乳幼児期の母親との快感覺体験」および「乳幼児期の基本的欲求の快感覺体験」に関する性差は χ^2 二乗

検定をおこなった。

2) ①「乳幼児期の母親との快感覚体験」と「意志力尺度の総和」・「意志力の各因子」との関連. ②「乳幼児期の基本欲求の快感覚体験」と「意志力尺度の総和」・「意志力尺度の各因子」との関連. ③「乳幼児期の遊び・生活体験」と「意志力尺度の総和」・「意志力尺度の因子」との関連について、いずれもピアソンの相関係数を算出した。統計解析はSPSS (for windows ver.17) を用い、有意水準は5%未満を採用した。

III 倫理的配慮

調査を行うに当たり施設長および協力者には口頭および文書にて研究内容と倫理的配慮について説明した。協力者には調査への参加は自由意志であり、いつでも撤回できること。調査の参加、不参加にかかわらず何らかの不利益を被ることのないこと。データは無記名・自己記入式であり個人は特定されず、研究以外に使用しないこと。研究終了後に質問紙は速やかに破棄する

こと。質問紙の回答をもって同意とみなすこと。調査結果を公表することとした。

IV 結果

質問紙配布数573部のうち回収数479部(回収率83.6%)、有効回答数476名(有効回答率83.1%)であった。

対象の属性は、476名のうち男子159名、女子316名、性別不明1名。年齢は15歳～18歳で平均年齢16.9±0.9歳であった。

1) 「乳幼児期における母親との快感覚体験」と意志力との関連

「乳幼児期における母親との快感覚体験」と意志力の総和および意志力各構成因子との関連について表2に示した。

「乳幼児期における母親との快感覚体験」と「意志力との総和」および「生存価値観」「生存意欲」「前向き力」「創造力」「忍耐力」はいずれも相関を示した。

表2 乳幼児期の母親との快感覚体験と意志力との関連

N=475

乳幼児の快感覚体験	意志力の総和	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
		生存価値観	生存意欲	前向き力	創造力	忍耐力
母親のそばで寝ていて安心できたか	0.301 **	0.418 **	0.12 **	0.16 **	0.136 **	0.129 **
母親の声で落ち着きましたか	0.352 **	0.398 **	0.211 **	0.193 **	0.115 **	0.142 **
幸せな気持ちでしたか	0.391 **	0.328 **	0.103 **	0.204 **	0.280 **	0.195 **

**p < 0.01

2) 「乳幼児期における基本的欲求の快感覚体験」と意志力との関連

「乳幼児期における基本的欲求の快感覚体験」と「意志力尺度の総和」および「意志力の構成因子」との関連について表3に示した。

「乳幼児期における食事・睡眠・入浴・排泄の快感覚

体験」の全項目と「意志力の総和」および「生存価値観」「生存意欲」の全項目、食事・入浴の全項目と「前向き力」、入浴の全項目と「忍耐力」、睡眠の2項目と「前向き力」、食事の2項目および睡眠の1項目と「忍耐力」、食事・睡眠・入浴の各1項目と「創造力」の間に相関を示した。

表3 乳幼児期の基本的欲求の快感覚体験と意志力との関連

N=475

乳幼児期の快感覚体験	意志力尺度総和	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
		生存価値観	生存意欲	前向き力	創造力	忍耐力
	おいしそうな匂い	0.228 **	0.271 **	0.188 **	0.165 **	0.065
食事	おいしい	0.262 **	0.285 **	0.152 **	0.148 **	0.109 *
	楽しい	0.303 **	0.325 **	0.204 **	0.159 **	0.083
睡眠	気持ちいい	0.270 **	0.235 **	0.131 **	0.103 *	0.063
	安心	0.200 **	0.206 **	0.159 **	0.054	0.08
	満足	0.224 **	0.244 **	0.124 **	0.118 *	0.096 *
入浴	気持ちいい	0.260 **	0.257 **	0.176 **	0.164 **	0.052
	安心	0.276 **	0.260 **	0.177 **	0.198 **	0.084
排泄	満足	0.301 **	0.297 **	0.195 **	0.213 **	0.102 *
	楽しい	0.124 **	0.131 **	0.110 **	0.053	0.23
排泄	安心	0.162 **	0.169 **	0.154 **	0.07	-0.011
	あたたかい	0.164 **	0.166 **	0.129 **	0.089	0.051

* p < 0.05 ** p < 0.01

3) 「乳幼児期の遊び・生活体験」と意志力との関連
「乳幼児期の遊び・生活体験」と「意志力尺度の総和」
および「意志力の各因子」の関連について表4に示した。
「乳幼児期の遊び・生活体験」と「意志力尺度の総和」
では15項目中13項目に相関がみられた。「乳幼児期の

遊び・生活体験」と意志力尺度の因子「生存価値観」は
14項目に、「生存意欲」は7項目に、「前向き力」は12項
目に、「創造力」は14項目に、「忍耐力」は13項目にいず
れも相関を示した。

表4 乳幼児期の遊び・生活体験と意志力との関連

N=475

	乳幼児の遊び・生活体験	意志力尺 度総和	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
			生存価値観	生存意欲	前向き力	創造力	忍耐力
運動・平衡 遊び	活動的な遊び	0.231**	0.228**	0.102*	0.159**	0.145**	0.135**
	手足や体を動かす遊び	0.261**	0.278**	0.134**	0.153**	0.137**	0.132**
	鉄棒・のぼり棒・雲梯	0.208**	0.181**	0.161**	0.115*	0.057	0.115*
	リズムカルな遊び	0.233**	0.238**	0.063	0.185**	0.176**	0.155**
	集団遊び	0.192**	0.178**	0.097*	0.159**	0.104*	0.081
受動的触 覚遊び	水遊び	0.243**	0.229**	0.152**	0.143**	0.139**	0.100*
	泥んこ遊び	0.224**	0.227**	0.099*	0.126**	0.162**	0.141**
	川遊び	0.055	0.091*	-0.068	0.045	0.183**	0.028
能動的触 覚遊び	草花遊び	0.170**	0.177**	0.002	0.117*	0.232**	0.137**
	手遊び	0.280**	0.267**	0.074	0.218**	0.262**	0.184**
	自然素材での遊び	0.204**	0.188**	0.017	0.157**	0.290**	0.139**
生命感覚 的遊び	虫取りの体験	0.072	0.067	-0.041	0.035	0.214**	0.084
	動物や虫とのふれ合い	0.153**	0.140**	0.018	0.076	0.225**	0.146**
受動的触 覚体験	抱っこされた体験	0.260**	0.322**	0.125**	0.129**	0.105*	0.129**
	おんぶされた体験	0.213**	0.279**	0.062	0.106*	0.153**	0.108*

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

4) 「乳幼児期における母親との快感覚体験」の男女別
比較
乳幼児期における母親との快感覚体験の男女別比較
を表5に示した。

母親との関係で「母親のそばで寝て安心」「母親の声で
落ち着く」「幸せな気分」の3項目とも「そうである」が男
性より女性の方が有意に高値を示した。

表5 乳幼児期の母親との快感覚体験の男女別比較

N=475

	母親のそばで寝て安心			母親の声で落ち着く			幸せな気持ち		
	0:あまり そうでない	1:少し そうである	2:そう である	0:あまり そうでない	1:少し そうである	2:そう である	0:あまり そうでない	1:少し そうである	2:そう である
男	21(4.42%)	69(14.5%)	70(14.7%)	29(6.10%)	72(15.1%)	59(12.4%)	23(4.84%)	75(15.7%)	62(13.0%)
女	14(2.94%)	87(18.3%)	214(45.0%)	24(5.05%)	91(19.1%)	200(42.1%)	13(2.73%)	97(20.3%)	205(43.1%)
差の検定値	*			*			*		

* $p < 0.05$

5) 「乳幼児期における食事の快感覚体験」の男女別
比較
乳幼児期における食事の快感覚体験の男女別比較を
表6に示した。

食事について、「おいしそうない」「おいしい」「楽し
い」3項目とも「そうである」が男性より女性の方が有意
に高値を示した。

表6 乳幼児期の食事の快感覚体験の男女別比較

N=475

	おいしそうない			おいしい			楽しい		
	0:あまり そうでない	1:少し そうである	2:そう である	0:あまり そうでない	1:少し そうである	2:そう である	0:あまり そうでない	1:少し そうである	2:そう である
男	15(3.15%)	113(23.7%)	32(6.73%)	15(3.15%)	102(21.4%)	43(9.05%)	22(4.63%)	105(22.1%)	33(6.94%)
女	15(3.15%)	195(41.1%)	105(22.1%)	12(2.5%)	175(36.8%)	128(26.9%)	18(3.8%)	181(38.1%)	116(24.4%)
差の検定値	*			*			*		

* $p < 0.05$

6) 「乳幼児期における睡眠の快感覚体験」の男女別比較
乳幼児期における睡眠の快感覚体験の男女別比較を

表7に示した。
睡眠について、「気持ちいい」「安心」「満足」の3項目とも男性より女性の方が有意に高値を示した。

表7 乳幼児期の睡眠の快感覚体験の男女別比較

N=475

	気持ちいい			安心			満足		
	0:あまりそうでない そうでない	1:少しそうである	2:そうである	0:あまりそうでない そうでない	1:少しそうである	2:そうである	0:あまりそうでない そうでない	1:少しそうである	2:そうである
男	10(2.1%)	64(13.5%)	86(18.1%)	14(2.9%)	64(13.5%)	82(17.3%)	19(4.0%)	60(12.6%)	81(17.1%)
女	9(1.9%)	103(21.7%)	203(42.7%)	15(3.2%)	105(22.1%)	195(41.1%)	13(2.7%)	111(23.4%)	191(40.2%)
差の検定欄	*			*			*		

*p<0.05

7) 「乳幼児期における入浴の快感覚体験」の男女別比較
乳幼児期における入浴の快感覚体験の男女別比較を
表8に示した。

入浴について、「気持ちいい」「安心」「満足」の3項目とも「そうである」が男性より女性の方が有意に高値を示した。

表8 乳幼児期の入浴の快感覚体験の男女別比較

N=475

	気持ちいい			安心			満足		
	0:あまりそうでない そうでない	1:少しそうである	2:そうである	0:あまりそうでない そうでない	1:少しそうである	2:そうである	0:あまりそうでない そうでない	1:少しそうである	2:そうである
男	19(4.0%)	79(16.6%)	62(13.1%)	21(4.4%)	80(16.8%)	59(12.4%)	20(4.2%)	84(17.7%)	56(11.8%)
女	12(2.5%)	151(31.8%)	152(32.0%)	24(5.1%)	164(34.5%)	127(26.7%)	22(4.6%)	157(33.1%)	136(28.6%)
差の検定欄	*			*			*		

*p<0.05

8) 「乳幼児期における排泄の快感覚体験」の男女別比較
乳幼児期における排泄の快感覚体験の男女別比較を
表9に示した。

排泄について、「楽しい」「安心」「あたたかい」の3項目とも「そうである」が男性より女性の方が有意に高値を示した。

表9 乳幼児期の排泄の快感覚体験の男女別比較

N=475

	楽しい			安心			あたたかい		
	0:あまりそうでない そうでない	1:少しそうである	2:そうである	0:あまりそうでない そうでない	1:少しそうである	2:そうである	0:あまりそうでない そうでない	1:少しそうである	2:そうである
男	70(14.7%)	73(15.4%)	17(3.6%)	59(12.4%)	80(16.8%)	21(4.4%)	59(12.4%)	79(16.6%)	22(4.6%)
女	116(24.4%)	158(33.3%)	41(8.6%)	89(18.7%)	176(37.1%)	50(10.5%)	96(20.2%)	175(36.8%)	44(9.3%)
差の検定欄	*			*			*		

*p<0.05

V 考察

1) 乳幼児期における「母親との快感覚体験」と意志力の関連

「乳幼児期における母親との快感覚体験」と「意志力の総和得点」には相関がみられ、個々の意志力構成要因である「生存価値観」および「生存意欲」「前向き力」「創造力」「忍耐力」のすべてに影響していることが示された。

乳幼児期における生活環境で最も重要な環境は母親である。乳幼児は母親（養育者）に養護されはじめて自分を取り巻いている環境に出会うことができる。乳

幼児は母に抱かれた時のぬくもりや匂い、声の響きなどで安心と心地よさを感じる。このことから、乳幼児は母親の愛情を感じることで情緒が安定し基本的信頼感が生れ、それが生きる力・意志力の基礎となる。母親の役割を果たす重要他者が存在する場合には、特に問題は起こらないといわれており画一的に言及することはできないが、本研究の結果は、意志力の育成には母親との快感覚体験が重要な要素であることが示された。

2) 乳幼児期における「基本的欲求の快感覚体験」と意志力との関連

食事では楽しいと意志力の構成因子である「創造力」との関連が唯一みられなかったが、他のすべての項目で意志力との関連がみられ、食事の快感覚体験が意志力の育成に関わっていることが示された。日本社会では1980年代ごろから「飽食の時代」を迎え、いつでも誰でも好きなものを食べることができるようになった。そして、便利さと引き替えに家庭での食事の準備が必ずしも必要とされなくなり、子どもの孤食やながら食、偏食、欠食がみられるようになってきている⁹⁾。近年、食事の乱れから「食育」が大きく取り上げられるようになり、平成16年厚生労働省の設置した「食を通じた子どもの健全育成のあり方に関する検討会」の報告書に、「楽しく食べる子どもに～食からはじまる健やかガイド～」が提示されている¹⁰⁾。

食事は、いつ、どこで、誰と、何を、どのくらい食べるかによって快感覚体験は異なってくる。本研究で得られた結果から、匂いに関しては外食でもいい匂いは得られるが、楽しい、おいしいに関しては、可能な限り家庭で家族とともに食べる、できれば手作りとし、インスタント・冷凍食品は避ける、適切な食事内容や調理への配慮などによって複合的に快感覚が得られるようにする。また、できるだけテレビはつけず、子どもと話しながら楽しく食べる習慣が大切となる。思春期にはさらに友人との食事をもふえ、人としてのコミュニケーションや満足を得る社会的・文化的意味をもってくる。この時期の子どもにさかのぼって乳幼児期の食事の快感覚体験が意志力に影響を与えていることが明らかになったことは新たな示唆といえる。

「睡眠」に関しては、睡眠の快感覚体験が意志力に影響するという結果であった。十分な睡眠時間は満足感の前提となる。睡眠時間に関しては、近年、幼児の就寝時間の後退が問題となっており、22時以降に就寝する幼児が4割に達し、夜間睡眠時間の短縮が明らかにされている^{11),12)}。夜遅くまで起きていることは、成長ホルモン、メラトニン、コルチゾールなどの内分泌・自律神経系の生体リズムを乱し、朝の目覚めが悪い、朝食が食べられない、外遊びの時間の短縮、集中力の低下につながり不快感を招くことになる¹³⁾。睡眠習慣に関する調査で睡眠時間の満足度は、就寝時間の遅い幼児の70%が「不足している」と回答しており、早い幼児の21.4%より有意に多くみられている¹⁴⁾。乳幼児期から子どもの良好な睡眠を保障するために、家族全員が協力して夜更かしを避け、睡眠をコントロールしているメラトニンの分泌を促すためにも、睡眠時には部屋を暗くすることが大切となる。

「入浴」に関しては入浴の快感覚体験が意志力育成に

関わっていることが示された。入浴における快感覚体験である気持ちいい、安心、満足は相互に関連しあっている。入浴は身体を清潔に保つためだけでなく、乳幼児期から心地よく楽しくすることが重要であり、風呂場の色や形に配慮し、壁に楽しい絵を貼る、やさしい言葉かけ、歌を歌う、身体を柔らかいもので洗う、親とのスキンシップなどが重要となる。入浴は水と触れるので、快感覚体験とはほど遠い熱すぎたり冷たすぎたり、また怖い思いをさせないように十分な配慮が必要である。

「排泄」は他の生活体験よりやや稀薄であるが、意志力の総和得点と構成因子の生存価値観、生存意欲との関連がみられた。乳幼児期の排泄のしつけはまず、清潔で気持ちのいい状態がわかるようにし、自分で行きたいときに行ける自由を獲得していく過程である。その中で生活の技術や社会のルールを身につけていく。排泄は、快・不快の感情を育てるには基本的な生活欲求の中で最もわかりやすい行為と言える。排泄がうまくできれば誉めたり、あたたかい言葉をかけ長い目で見守る姿勢が大切になってくる。また、排泄に対するマイナスイメージをもたないように、大人は「汚い」「臭い」という言葉を発しないことも大切である。中でも便秘は子どもにとって不快感につながる。幼児の便秘の大部分は毎日の食生活にあると言われており、食物繊維を含んだ野菜の多いバランスの摂れた食事の摂取に心がけるようにする。

睡眠・食事・排泄などの生活リズムは連動しており、就寝時間の早い子は起床時間も早く、朝食をしっかり食べ、排便も余裕を持ってすませている実態調査が報告されている¹⁵⁾。睡眠の快感覚を体験するためには、食事時間や入浴時間・方法、テレビ内容・視聴最終時刻、睡眠に対する親の認識など生活全体を見直さなければならない。乳幼児期の基本的な生活の快感覚体験を得るためには、健康な生活習慣の確立が前提となる。

3) 乳幼児期の「遊び・生活体験」と意志力との関連

乳幼児の遊び・生活体験と意志力との関連では、川遊びと虫取り体験でやや稀薄だったものの、15項目すべてが意志力と関連していた。

本報で用いた遊び・生活体験は、能動的・受動的に身体を動かしたり、人や動物・植物など自然に触れるものである。これらの体験は7歳までに育成することが望ましいとされ、シュタイナーが意志感覚として提唱している4つの感覚、すなわち、触覚、運動感覚、平衡感覚、生命感覚との整合性がみられた¹⁶⁾。

「運動・平衡遊び」の中の運動感覚は、静と動、身体の曲げ伸ばしに関わっており、シュタイナーはこれを自身の動きの感覚といっている。平衡感覚は4感覚のうち、唯一器官が特定されている三半規管により、自

身の左右、前後、上下との関わりを伝えている。ここで抽出された遊びには、活動的な遊び、手足や身体を動かす遊び、鉄棒・上り棒、リズムカルな遊び、集団遊びなど運動感覚と平衡感覚が同時に働いていることが示された。また、「意志力の総和」および意志力構成因子の「生存価値」「前向き力」と「運動・平衡感覚」「能動的触覚遊び」すべての項目で有意な相関がみられた。さらに、「生存価値観」は「受動的触覚遊び」のすべてと、「創造力」は「受動的触覚遊び」および「能動的触覚」「生命感覚遊び」のすべての項目で、さらにまた、「忍耐力」は「受動的触覚遊び」「能動的触覚遊び」のすべての項目との相関がみられ、意志力育成への影響力の大きさが示された。

感覚体験のうち触覚は生後すぐに体験される感覚であり、原感覚ともいえるものである。触覚によって柔らかさ、硬さ、粗さ、滑らかさなどを感じ取り、触れることを通して快・不快の感覚体験が起こってくる。このことは、今回の研究から明らかになった乳幼児期の快感体験の重要性との関連でとらえることができる。

抱かれた体験とおんぶされた体験は意志力の総和およびほとんどの因子との有意な相関がみられた。テクノロジー化され、人間の絆が希薄になる現代社会環境のなかで、成長発達の途上にあり身体や心が無防備な乳幼児にとって、抱かれる・おぶられる体験が意志力に大きく影響することが明らかになった。また、実態のある身体を使った遊びが意志力育成に関わるということが示唆された。

4) 男女別にみた「乳幼児期の快感体験」の比較

「乳幼児期における母親との快感体験」、および「乳幼児期における基本的欲求の快感体験」のいずれの項目においても女性が男性に比べて有意に高い結果となった。本調査で回答を求めた乳幼児期の体験は、想起によってイメージとして自分の中に残っている感じを問うものである。女らしさ・男らしさというジェンダー・ステレオタイプは、生後まわりの人のやっていることや言っていることを見たり聞いたりしてつくられたという考え方もあるが¹⁷⁾、女性は男性に比してはるかに直感が働き、繊細な感覚能力をもっていると考えられている¹⁸⁾。母親との乳幼児体験や基本的欲求の快感体験が女子に高いのは、もともと性差は遺伝子で規定されており、人間の思考や行動は胎児期につくられる脳の配線やホルモンの働きによって決められるといわれ¹⁹⁾、女性はふれあいを大事にしており、皮膚の感受性が高いことにも起因していると考えられた²⁰⁾。したがって、女子が自らの身体の変化を実感し、乳幼児期における母親との快感体験を認識できることは十分に考えられる。しかし、社会的に活躍する女性が

増加し、性役割は流動的になってきており、さらに、グローバル時代を迎え自己のアイデンティティが保ちにくい時代を迎えている²¹⁾。自己認識のアイデンティティを保つためにも乳幼児期からの意志力育成は重要な課題である²²⁾。

5) 乳幼児期の快感体験と意志力との関連

本報の結果から、意志力を培うためには乳幼児期の生活における快感体験の重要性が明らかになった。生後数時間の新生児にも快・不快の表情がみられるが、これは反射的なものと考えられており²³⁾、ブリッジエスの情緒の分化によれば快・不快の感覚は3ヶ月頃に認識できるとされている²⁴⁾。人間が心地よいと感じるものの、そのほとんどが自然的なものであり、「1/fのゆらぎ」という生体リズムをもっていることが研究的に解明されてきている²⁵⁾。子どもは誉められたりして気分がよくなると、何でも積極的にやるようになる。快適な気分は、快感神経と呼ばれるA10神経にあることは、1978年に明らかにされている²⁶⁾。A10神経から分泌されるドーパミンにより、脳は気持ちよさを感じ、同時に脳細胞が覚醒し活動が活発化する。その結果、やる気がでて、忍耐力、気力、創造力、感動などの心理過程に関わり、生き生きと生きることにつながることになる。人間の脳の神経細胞の多くは、大脳皮質にあるものを含めて、快・不快に密接に関係した活動をするようである²⁷⁾。ただし、感情や情感の研究は未知のことが多く、さらに子どもの情緒は未分化であり、これからの研究が待たれるところである。

社会環境の急激な変化に伴い子どもたちの多くは生活リズムを正常に保つことが困難な状況にあり、健やかに成長発達できるかどうかの非常に危うい状況に置かれており、子育て支援が社会の大きな課題となっている。国家的事業として“健やか親子21”を実施している。その課題には「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」「子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減」が含まれている。思春期は急激な性ホルモンの分泌によりわずかなことで感動する、反抗するなど行動の変化を招き、同時に後悔や罪悪感、孤独感などを体験し、心理的動揺の大きい時期といえる²⁸⁾。思春期の意志力に乳幼児期の生活体験が大きく関連することが明らかになり、子どもの育成への支援に大きな示唆が得られた。一方、小児看護では、一時的な病気の症状や問題解決のみでなく、子どもの健やかな育ちのために数十年先を見通した対応が求められている。小児看護の目標には、健康の重要な要素として「健やかな成長・発達」ととげることであると明記されている²⁹⁾。本研究において明らかになったライフステージの早期からの子どもへの関わりが、その後の人間形成、特に思春期の危機的状態の時期にも影響を及ぼすことは子

どもの育成にとって重要な点といえる。本報で得た結果は、大学生を対象とした研究結果³⁰⁾とほとんど同様な結果が示された。

なお、この研究の限界は高校生の乳幼児期体験を想起によって得られたものであり、対象者の人数に男女差のあることである。

VI 結論

1. 「乳幼児期における母親との快感覚体験」と「意志力尺度の総和」および「意志力尺度因子」のすべてにおいて有意な正の相関を示した。
2. 「乳幼児期における食事・睡眠・入浴・排泄の快感覚体験」の全項目と「意志力尺度の総和」、および意志力尺度因子である「生存価値観」「生存意欲」とはすべて有意な正の相関を示した。
3. 「乳幼児期の遊び・生活体験」の全項目に対して「意志力尺度の総和」、および意志力尺度の因子はいずれも正の相関を示した。
4. 高校生の「乳幼児期における母親との快感覚体験」と「乳幼児期における食事・睡眠・入浴・排泄の快感覚体験」の全項目において、男子より女子が有意に高値を示した。

謝辞

本研究にあたり、ご多忙中にもかかわらずご協力いただいた高校生の皆様、学校関係者の皆様に深謝いたします。

文献

- 1) 鍵小野美和, 川出富貴子他: 幼児期における遊びの質とおよび生活状況と「意志」との関連, 川崎医福会誌, 18(1), 245-250, 2008.
- 2) 鍵小野美和, 川出富貴子, 宗像恒次他: 大学生の意志力の構成因子と乳幼児期体験, 医学と生物学, 153(6), 200-209, 2009.
- 3) 川出富貴子: シュタイナーの人間観 (I) — 看護過程導入への試み —, 三重県立看護短期大学紀要, 10, 97-104, 1989.
- 4) 川出富貴子他: シュタイナーの人間観 (2) — 発達論 —, 三重県立看護短期大学紀要, 15, 31-38, 1994.
- 5) 奈良間美保他: 系統看護学講座・小児看護学[1], 132,

医学書院, 2010.

- 6) 筒井真由美他: 小児看護学, 54, 日総研, 2007.
- 7) 前掲書 2).
- 8) 前掲書 2).
- 9) 杉浦克巳: 発育発達と食育, 子どもと発育発達, 6(1), 14-22, 2008.
- 10) <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/02/so219-3.html>.
- 11) 日本小児保健協会: 平成12年度幼児健康度調査について, 小児保健研究, 60, 543-587, 2002.
- 12) 星野恭子: 日本の子どもの睡眠事情, 保健の科学, 51(1), 43-48, 2009.
- 13) 近藤洋子: 幼児期の育児環境と子どもの発達, 保健の科学, 49(6), 382-385, 2007.
- 14) 古谷真樹他: 幼児の夜ふかしと主養育者に対する睡眠教育の重要性, 小児保健研究, 67(3), 504-512, 2008.
- 15) 宮口和義, 出村慎一他: 幼児の生活習慣と基礎運動能力との関係, 教育医学, 54(2), 149-157, 2008.
- 16) A.スズマン・石川秀治訳: 魂の扉・十二感覚, 18-85, 耕文舎, 2007.
- 17) 森永康子: 女らしさ・男らしさ, 52-62, 北大路書房, 2003.
- 18) アラン・ピーンズ, バーバラ・ピーズ, 藤井留美訳: 話を聞かない男・地図が読めない女, 主婦の友社, 33-34, 51, 2000.
- 19) 新井康允: ここまでわかった! 女の脳・男の脳—性差をめぐる最新報告書, 講談社, 1994.
- 20) 前掲書 18).
- 21) 岡田英弘編著: グローバル時代の自己認識, 日本経済評論社, 2-27, 235-245, 2001.
- 22) 前掲書 19).
- 23) 直行廣中: 快樂の脳科学, 日本出版放送協会, 34, 76-77, 102, 2003.
- 24) 前掲書 5).
- 25) 武者利光: 快・不快を感じる理由, 河出書房新社, 20, 78-80, 180, 236, 248-249, 1999.
- 26) 小川博章: ガンバリズムが歯を壊す, 現代書林, 116-121, 1997.
- 27) 前掲書 5) 136.
- 28) 前掲書 5) 6-8, 105.
- 29) 松尾則武・濱中喜代他: 概論・小児保健・小児看護の対象と目標, メヂカルフレンド社, 25, 2008.
- 30) 前掲書 2).

The relationship between the experiences of infancy and childhood and the “willpower” of high school students of puberty.

Fukiko Kawade ¹⁾ Norimi Takata ²⁾ Mikiko Kawasaki ³⁾ Miwa Kagiono ⁴⁾

¹⁾ Hiroshima Bunka Gakuen University

²⁾ Ehime Prefectural University of Health Sciences

³⁾ Ube Frontier University

⁴⁾ Gifu University of medical science

Summary:

In order to clarify the relationship between the experiences of infancy and childhood and the “willpower” of high school students in the sensitive period of puberty, we conducted a survey using a self-completed questionnaire among 476 high school students (response rate 83.1%).

1. “Pleasant sensory experience with the mother in infancy and childhood” showed a positive correlation with the “aggregate measure of willpower” which consists of the five constituent factors, “survival value”, “survival motivation”, “proactivity”, “creativity”, and “patience”. 2. “Pleasant sensory experience of eating, sleeping, bathing and excreting in early childhood” showed a positive correlation with the “aggregate measure of willpower” consisting of “survival value” and “survival motivation”. 3. “Life experience of playing in early childhood” showed a positive correlation with the “aggregate measure of willpower” consisting of “survival value” and “creativity”. From these results it was found that infancy and childhood experience is associated with adolescent willpower. For all items in “Pleasant sensory experience with the mother in infancy and childhood” and “Pleasant sensory experience of eating, sleeping, bathing and excreting in infancy and childhood”, females showed higher values than males.

Keywords : high school student, willpower, infancy and childhood, pleasant sensory experience, play

